THE IDOLM@STER　memorial stars

とじひも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＴＨＥ　ＩＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ　ｍｅｍｏｒｉａｌ　ｓｔａｒｓ

【Ｎコード】
Ｎ０２７１Ｚ

【作者名】
とじひも

【あらすじ】
７６５プロ所属のプロデューサーの彼には、過去の記憶がない。
アイドルたちと過ごした日々、思い出――――そういった全てを思い出すことは、もうない。
それでも彼は、アイドルプロデュースをやめない。
絶対、トップアイドルにしてみせる。
それが、彼に唯一残った、アイドルたちとの約束だから――――これは、記憶を失ったプロデューサーと、そのアイドルたちとの、少し歪な物語。

プロローグ

冬の寒さがしんしんと肌にしみるようになってくると、事務所の老朽具合もまたありありと体感できるようになる。

築何年とも知れないオンボロ建造物。隙間という隙間から外気が忍び込んできている気がする。彼は小さく体を震わせて、作業に邪魔な益体のない考えを吹き飛ばした。

彼が書類の細かな文字たちとの格闘を再会しようとすると、頭上から声がかかる。

「遅くまでお疲れ様です、プロデューサーさん」

事務員の小鳥がいつものようにお茶を入れてきてくれたようだ。熱々と立ち上る湯気の向こうに小鳥の柔和な笑顔がのぞいている。

「すいません、いただきます」
「まだお時間はかかりそうですか？」
「あぁ、いえ……」

ふと気付いたように彼は時計を確認した。それなりに遅い時刻を針が示している。

「これは別に急ぎの要件ってわけでもないですよ」
「そうなんですか？」
「はい。ただ、ちょっとこの後約束がありまして……」
「……あぁ。そういうことですか」

全てお見通し、とばかりに小鳥はいたずらっぽい笑みを浮かべる。

「ええ！？　今のでなんだかわかるんですか？」
「わかりますよ。だって今日は……」

ガチャッ、と勢いよく開かれた扉の音で、その先はかき消された。

「プロデューサーさん！　遅くなりました！」

一人の女の子が飛び込むように事務所に入ってくる。彼女のトレードマークである赤いリボンは角度が微妙にずれ、髪のあちこちが乱れている。ぜぇぜぇ、と息を荒くして、しばらくの間その場で呼吸を整える様子を見ていると、どうやら相当に急いで帰ってきたことがうかがえる。
――そんなに楽しみにしていたのだろうか。

「あわてなくても逃げやしないぞ、春香」
「で、でも、お待たせするのは申し訳ないじゃないですか！」

天海春香。彼のプロデュースする――765プロのアイドルの一人だ。
しん、と静かだった事務所の雰囲気も、彼女がいるだけでなんとなく明るくにぎやかなものになった気がした。その場に華が咲いたような気分にさせてくれるのは、やはりアイドルであるだけのことはある、と思うのは、いささか身内びいきが過ぎるのだろうか。

「あの、私の顔になにかついてますか？」
「……いや。頭、ぐしゃぐしゃになってるぞ」
「えぇ！？　本当ですか！？」
「はいはい、春香ちゃん、ちょっと動かないでね～」
「あ、あ、すいません！」

小鳥がすっと近寄って、春香の髪型を整えていく。その間に彼は、ざっと仕事机の上を片付けて、出かける準備をする。

「……よし」

なんとなく、ぎゅっとネクタイを締めなおして、彼はことさらに大きな声を上げてたずねる。

「春香、今日は何が食べたい？　ある程度までなら値の張ったおねだりを
聞いてやれるぞ。給料日後だからな」

言った瞬間、春香の目がぱっと輝くのが見えた。

「わーい、やった！　じゃあ、えっと……うーん、ステーキ、とか？　いやいや、焼肉？　あ、フレンチもいいなぁ……」
「……ある程度まで、な」

くすっ、と含み笑いをこぼしながら、困ったような顔を向けてくる小鳥を、彼はあいまいな表情で見返した。

「もうすっかり冬ですね、プロデューサーさん」

はぁ、と吐息が白いのを確認して、春香は言った。

「あぁ……そろそろデスクワークがつらくなってきた」
「ははは……事務所もいい加減新しくできたらいいんですけどねぇ」
「お前たちが頑張ってくれたら、それもまた夢じゃないんだが……」
「う……頑張ります」

決して売れっ子とは言えない身としては、痛いところがあったのか、申し訳なさそうな声が返ってくる。慌てて冗談だよ、と笑ってやった。

「春香たちは全力でやってくれてるさ。あとは俺が何とかしなきゃな」

「そ、そんなことないですよ！　プロデューサーさんだっていつも全力で助けてくれるじゃないですか！」

「……ってことは、もうこれ以上春香が売れることはないってことか？」

「え？　あ、あれ……？」

眉間にしわを寄せて真剣に悩み始める春香の様子を見て、思わず吹き出す。

「からかわないで下さいっ！」

悪い悪い、と適当に返事をしながら、彼は胸の中が安堵で満たされていることに気づく。

そう、実を言うと不安だったのだ。こんな風に、アイドルと二人きりになってしまうこと。――彼のことを、彼以上に知っている人物と、うまく話をあわせられるのかどうか。

「杞憂か……」

「……え？」

「なんでもない」

そう、杞憂だ。

引け目を感じすぎているのだ、と思う。だから逆に神経質になっ

てしまっている。過去の自分に。過去の自分を知っているアイドルたちに。

自分は自分だ。どこまで行っても自分でしかない。普通にしていればいいのだ。それで、日常は変わらずに進む。

――言い聞かせるように繰り返すことさえ、それを無視できていない証左である。だが、彼はそのことに気付いていなかった。

「なぁ、それはそうと、どうして突然ごちそうして欲しいなんて言ってきたんだ？　なにかあったのか？」

「……え？」

――ぎぎっ、と歯車の食い違った音を聞いた。

「プロデューサーさん、わかってなかったんですか……？」

「春香……？」

「だって、今日は、大切な……」

まるですがりつくように、まっすぐ瞳をあわせてくる春香をまともに見つめることができずに、彼はおそるおそる口にする。

「悪い……今日は、何かの日だったのか？」

「……っ」

やってしまった、ということはわかった。

「お、おい、春香！？」

静止の声はとどかなかった。伸ばした手は振り払われた。

まるで、今の自分が否定されてしまったみたいに。

「……あーあ」

ため息までもが、忌々しいくらいに夜の暗闇に白く輝く。

ウソでもいいから、とりつくろうようなセリフを告げればよかったのだろうか。

彼女の期待に、応えてあげるべきだったのだろうか。

――そもそも、なぜ期待されなければならないのだろうか。

――彼女たちにだってわかってるはずなのに。

「大切な、って言われても、わからないよな……」

わかるはずがない。

彼女にとって自明の事実でも、彼にとってはそうではない。

たとえそれが、彼女と彼との記憶であっても。

「だって、俺には……もうない記憶なんだからさ」

――これは、記憶を失ったプロデューサーと、そのアイドルたちの、少し歪な物語

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0271z/

THE IDOLM@STER　memorial stars

2011年12月1日00時49分発行